

想定されなない女性たち

老後時代

3

70代以降の暮らしを想像することもできない。そんな若い女性が増えている。

神奈川県に住むナオさん(35)は大学進学後、友人たちと関係をうまく築けず、退学した。時給9000円ほどのアルバイトで未明まで居酒屋で働きながら、医療事務の職業訓練校に通ったが、体調を崩した。

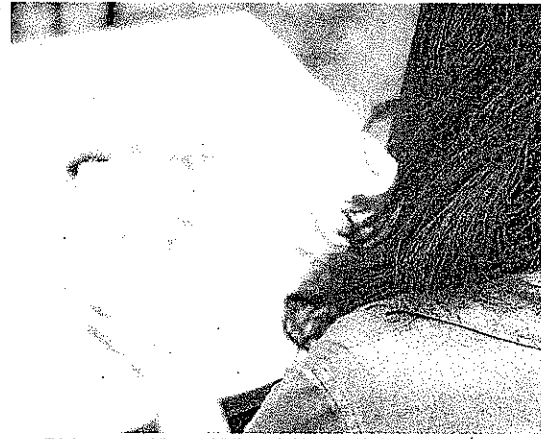
自宅に引きこもった。一日中、部屋から出られず、音楽を聴いたり、本を読んだりして何年も過ごした。暗黒の20代だった。30代になり、引きこもり

を脱してからは、実家を出て非常勤の仕事掛け持ちし、生計を立てている。今は毎日が充実しているが、数十年先の老後のことを思うと怖くてたまらない。将来のために資格を取りたくても、現在の収入だと学費を出すのは難しい。

「努力したくてもできなかった人は私以外にも多いはず。高齢になったら生活保護しかないのですか。レールから一度外れると、ずっと落ちこぼれ人生なのでしょいか」

将来が後回し

現在の30代が70代となる2060年には高齢化率が4割に迫る見通しだ。男性より長寿の女性高齢者が必然的に増え、日本は「おぼあちゃん国」になる。その主役となる女性たちの足



引きこもりだった35歳の女性は、仕事についていないシングル女性を対象にした講座を受けて、立ち直るきっかけをつかんだ。男女共同参画センター横浜南

元には不安が忍び寄る。ナオさんが再び働き始めるきっかけとなったのは、横浜市の男女共同参画推進協会が主催する「ガールズ講座」に通ったことだった。生きづらさに悩み、仕事をしていた15歳から39

歳のシングル女性を対象に、安心感や自己肯定感を培って就業につなげる。「婚活と就活のはさまに落ち込み、親が老いたら介護を押しつけられ、自分の将来が後回しになる女性たちが増えています」と同協

会男女共同参画センター横浜南の小園弥生館長(58)は言う。昭和の日本では、女性たちの多くが家庭に入り、夫

非正規から抜け出せない

1990年代後半から2000年代半ば、就職氷河期に社会に出たロス・ジエネレーションの女性たちも老後に憂いを抱える。

契約社員やパートの女性(43)は、台風15号で都内の鉄道がまひした9月9日の朝、4時間半かけて出勤し、いつも昼食以外は席を外さず、給湯室でお茶をすすめる暇もない。それだけ根を詰めて働いても、現在の年収は280万円ほどだ。

大企業に勤める父と、社内結婚で専業主婦となった母、子2人の一標準家族に育った。中堅大学に進学して就職活動をしたのが、就職氷河期の1999年。100社以上の企業に資料

が稼ぎ手となった。平成以降、家族餉が多様化したにもかかわらず、単身女性を支える仕組みはない。総務省の18年の労働力調査によ

請求のしがきを送ったが、面接に進んだのは2割ほどで、すべて不採用だった。父の知人の紹介で中堅企業の正社員になったが、そこは女性に補足的な仕事しかさせない職場だった。能力をもっと高めたくて3年半で辞職した。その後、薄記や社会保険労務士などの資格の勉強をしながら派遣や契約社員を中心に転職を重ねたが、待遇や労働条件は逆に悪くなった。

働いた企業の数多くでは、事務職を非正規社員に置き換えて人件費を削っていた。そんな職場には決まってロスジエネ世代の非正規

ると、雇用のうちの非正規労働者の割合は男性が22%なのに、女性には56%。非正規労働者の約7割を女性が占めている。

女性たちが大勢いた。65歳以降にももらえる年金を試算すると、現時点で月額6万円程度、今後と同様に働いて10万円ほど。「老後を年金だけで暮らすのは不可能です。長く働き続けるしかありませんが、体力も落ちる。私たちの世代は努力がまるく報われない」

非正規シングル女性を対象に横浜市男女共同参画推進協会などが実施したウェブアンケートでは、約83%が「老後の生活」に不安を感じていた。「退職金もな

く将来生きていくのであれば生活保護しかない。安楽死施設を開設して欲しい」と30代の女性は回答した。調査を担当した白藤香織

さん(50)は多くの女性たちの声を聞いた。「いつまで働き続けられるのか、老後にどれほど貯蓄が必要なのか、誰も教えてくれない。非正規シングル女性たちは、社会から想定されていない人たちなのです」

国際医療福祉大学の稲垣誠一教授によると、未婚・離別のシングル女性は、2050年には高齢女性の3割近く、約583万人に達し、その約45%が生活保護レベルの貧困に陥ると推計されるという。

「親と同居の女性は、死別後に困窮する。結婚で仕事を辞めた女性は離婚すると非正規で働くことが多い。貯蓄が少ないと80代、90代までもちません」

「想定されていない」人たちもいずれば高齢化し、支えが必要となる。非正規雇用で低コスト労働力に甘んじてきた女性たちの老後に、日本社会は遠くから向き合うことになる。

(編集委員・真鍋由樹)